平成19年 4 月 1 日

巻頭言

山梨県立中央病院
内科　宮下義啓

平成17年度山梨県における肺癌死亡者数は394名（全国合計62063名）であり、山梨県の同年検診発見肺癌数は 40 名であった。肺癌死亡者数は年々増加傾向であり、検診による早期肺癌の発見とともに、有効な治療方法の確立が望まれています。

近年はCT検診、PET検査、MDCTなどの放射線診断学の進歩とともに胸腔鏡下肺切除の普及および定位肺照射治療の臨床導入もあり、早期肺癌症例については治療方法の選択肢は増えていると考えられます。

一方、内科領域で扱う進行肺癌症例に関する治療は新規抗癌剤を用いた治療方法が推奨されているが、未だ、治療の成績は厳しい状況にあり、分子標的薬を含む新たな治療方法の確立およびその導入が待たれています。

今回の肺癌研究会では緩和医療に関する特別講演を中京病院の吉本鉄介先生にお願いいたしました。山梨県でも緩和ケアー病床はわずかであり、肺癌を含む癌終末期の多くの症例が一般の病床で療養されていると考えられます。早期発見で治癒する肺癌症例も肺癌の治療が外来で継続され、癌と共に生きる事を余儀なくされる患者さんも常に希望と不安を抱えて療養されています。癌患者の診療にあたる臨床医は積極的な癌治療に取り組むと同時に、常に、患者の心のケアーに関心を持ち、予後の厳しい癌治療に於いても治療や療養に前向きに参加出来るように患者支援を行うことが求めらています。

標準化された治療方法に準拠しつつ、優れた治療の普及を進める中で、多くの臨床医は有効な癌治療方法の提示が行えない状況の患者さんとも常に向き合う事を迫られます。その方々それぞれの希望を聞きながら、多くの癌患者が加療される一般病棟および外来診療に於いてこそ緩和ケアーの神髄が実践されるべきと思います。